

## Beaudeker

Wer reisen will,  
Der schweig fein still,  
Geh steten Schritt,  
Nehm nicht viel mit,  
Tret an am frühen Morgen,  
Und lasse heim die Sorgen.

Philander von Sittewald. 1650.

## “How I Write” by Bertrand Russell, 1951

Until I was twenty-one, I wished to write more or less in the style of John Stuart Mill. I liked the structure of his sentences and his manner of developing a subject. I had, however, already a different ideal, derived, I suppose, from mathematics. I wished to say everything in the smallest number of words in which it could be said clearly. Perhaps, I thought, one should imitate **Beaudeker** rather than any more literary model. I would spend hours trying to find the shortest way of saying something without ambiguity, and to this aim I was willing to sacrifice all attempts at aesthetic excellence

本との出会い：ベデカーの旅行案内 高橋 健二、日本経済新聞 1976年5月2日

私が最も多くおかげをこうむっている本の一つは、ベデカーの旅行案内である。それとの出会いは半世紀前にさかのぼり、付き合いは今も続いている。

昨年四回目にウィーンに行った時も、一九三一年版のベデカーの『オーストリア』を持っていった。そんな古いものと、ひとは笑うかもしれないが、どんな新しいウィーンのガイドブックより役立ったのである。新しい市区は別だが、古い由緒ある市区の記述は、四十五年前の版で正確に知ることができる。おそらくワルツ王シュトラウス親子が華麗な活躍をした十九世紀のウィーンのおもかげを忠実に伝えているであろう。ベデカーをもって町を歩くと、ベートーベンやシューベルトなどをはじめとして、多彩な芸術家のゆかりの家や場所を知ることができ、尽きぬ興味をおぼえる。記述者が史実を研究したうえ実地に踏査して書いているので、記述に信頼性の高いことは定評があるが、文化史的にも啓発されるところが多く、簡潔で具体的で読み物としてもおもしろい。

最初買ったのは、一九二五年版の『ドイツ』（全一卷）であるが、これは十三回私と共に欧州旅行したので、ぼろぼろになった。汽車旅行が主になっているから、今日の自動車旅行時代には役立たないが、比較してみると、古いドイツが大切に保存されていることがわかる。イタリア版も一九三一年ののだが、まだ大いに役立つ。ガルダ湖畔でゲーテが古城をスケッチしていたら、スパイと疑われ、危かったことなども記されている。ゲーテの『イタリア紀行』と比較すると、美術史的にも教えられるところが多い。

何よりも「旅するものは、ことば少なに、持ち物を少なく、心配ごとはうちに残して」という巻頭のモットーは、二十代から私にとっても旅の心がけとなった。

(独文学者)

著作権継承者様・日本経済新聞社からの転載許諾済み